



G.フォルスターと『新マインツ新聞』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船越, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006153

G. フォルスターと『新マインツ新聞』

船 越 克 己

1

キュスティーン将軍に率いられたフランス共和国軍は難なくマインツを占領する(1792年10月21日)。ドイツ最初の共和国誕生の序曲はここからはじまる。議員選出のための選挙のあと、第1回「ライン・ドイツ国民公会」がマインツのドイツハウスで開かれた¹⁾(1793年3月17日)。翌18日の主権樹立宣言と相まって、いわゆるマインツ共和国が誕生したのである。しかしライン左岸に産声を上げたこの共和国は長くは持たなかった。ドイツの軍隊によるマインツ包囲がすぐはじまる(4月14日)。2万3000のフランス軍に対し、ドイツ軍はおよそその倍を数えた。マインツのフランス軍は降伏し(7月23日)、それにつづいて革命に関与した多くのドイツ・ジャコバン主義者への迫害が激しさを極める。²⁾

『新マインツ新聞または民衆の友』(Die neue Mainzer Zeitung oder der Volksfreund 以下、『新マインツ新聞』と記す)はマインツ共和国成立前後に発行された(第1-38号、1793年1月1日-3月29日)新聞で、4頁立て週3回(火・金・日曜日)定期的に出されている。編集主幹ともいべき人物はいわゆるマインツ・ジャコバンクラブ(正式名称は「自由と平等の友の会」)の会長ゲオルク・フォルスターである。マインツにはすでに4種類の革命的文学・政治雑誌が存在していた(M. メッテルニヒ編『市民の友』(Der Bürgerfreund) 1792.10.26.-1793.4.17.; K. ハルトマン/J. D. モイト編『フランス共和主義者』(Der fränkische Republikaner) 1792.11.16.-1793.2.15.; G. ヴェーデキント編『愛国者』(Der Patriot) 1792.11.21. [あるいは24.] -1793.2.9.; A. フックス編『コスモポリタンの観察者』(Der kosmopolitische Beobachter) 1793.1.1.-3.21.)。5番目に発刊された『新マインツ新聞』は「1793年1月以降のマインツにおける展開の叙述のための1つの重要な出典であり、質においても最もすぐれた新聞であり、巻頭記事、通信、それに娯楽めいた記事を載せている。」³⁾ちなみにメッテルニヒの『市民の友』には説教臭い啓蒙的内容の記事⁴⁾が目立つのに対し、『新マインツ新聞』は刻一刻と変化する時局をできるだけ広範囲にわたって、早く、正確に読者に伝えようとする。それでいて読者を最後の記事まで引きつけて離さない筆力に、われわれは舌を巻かざるをえない。

『新マインツ新聞』の発行にさいしては、つぎのような事情があった。フランス軍による占領時のマインツには2種類の新聞が刊行されていた。すなわち「選帝侯より特権を賜ったマインツ新聞」(Kurfürstlich privilegierte Mainzer Zeitung)ならびに「マインツ通報、選帝侯より特別の恩恵を賜って」(Mainzisches Intelligenzblatt, mit kurfürstlichem gnädigsten Privilegium)である。前者『マインツ新聞』は隔日に発行されていた。後者『マインツ通報』は週2回発行され、「当局の指令、法廷への出頭命令とか、寓話、広告のたぐい」⁵⁾を掲載していた。『マインツ通報』はフランス占領後、「マインツ通報、フランス国家の臨時の許可を受けて」(Mainzer Intelligenzblatt, mit provisorischer Genehmigung der fränkischen Nation)と改名し、『マインツ新聞』よりもずっと官報、広報紙の色彩の濃い、唯一の「官庁機関紙」として刊行された(1792.11.7.-1793.7.20.)。⁶⁾他方、『マインツ新聞』

は『マインツ国民新聞』(Mainzer National-Zeitung)の名のもとに、G.W. ベーマー⁷⁾によって週3回刊行される(1792.11.1.-1793.4.17.)。旧来の新聞名に“National”(国民の)という副題が添えられたが、それは自由市民として生成するマインツ「国民」に向けられたものであり、全ドイツの解放の願いがこめられている、⁸⁾という。しかしながら『マインツ国民新聞』はフォルスターによって非難の対象となり、『新マインツ新聞』発刊の引き金となったのである。

ところで『マインツ国民新聞』の発行人ベーマーその人はその後、フランスとドイツの勢力が激しく主導権を争う西南ドイツにあって、一方では「革命」との絶対的連帯を証言するが、他方では「変節」の傾向を露呈する。しかしたとえベーマーがその革命活動において、占領者キュスティーン將軍と結託して自己の地位を利用したにせよ、かれが「マインツ・ジャコバン派誕生の不可欠な仕掛け人の一人」であったことはまちがいない。だからこのドイツ人の「知性と性格の不十分さ」がかれの「歴史的功績」を損ずるものではない。⁹⁾マインツ革命研究の重鎮、H.シェールはこのようにベーマーを評価している。

2

先ほどのベーマーの新聞の副題“National”に対し、フォルスターは『新マインツ新聞』に“Der Volksfreund”(民衆[あるいは人民]の友)というサブタイトルをつけている。これはかのマラーの『人民の友』(L'Ami du peuple; 1789.9.12. 発刊。1792.9. 『フランス共和国新聞』と改題)紙を暗示する、とされる。¹⁰⁾フォルスターが直接マラーの『人民の友』紙に言及している個所を筆者はまだ知らないが、¹¹⁾おそらくフォルスターはマラーの新聞については多くを語らず、『新マインツ新聞』の副題にその名をとどめることでよしとしたのであろう。ところで前川貞次郎氏によれば、マラーの『人民の友』の内容は事実の報道というよりも、発行者の見解を展開した「社説」に似たものが主であった。その発刊趣意書のなかにマラーはつぎのように書いている。「そこでは、三部会の仕事を注意してみまもり、たえず[革命の]よい原理を思いおこさせ、人間の諸権利をとりもどし、市民の諸権利を確立し、賢明な政治組織を示し、国家の不幸の源泉をなくす手段をのべ、統一と富裕と平和とをもたらす手段が明らかにされるであろう」。¹²⁾1792年9月20日、フランス国民公会が成立し、その議員としてパリから選出されたマラーは革命政治家としてダントン、ロベスピエールとともにモンターニュ派の3巨頭の一翼をになうことになる。

マラーの書いた「人間の諸権利」と「市民の諸権利」というフランス革命の原理をマインツの地に根づかせること、これこそがフォルスターをしてマインツ革命運動に挺身させた最も重要な要素である。いわばフランス革命の成果をマインツへ移植することである。したがってフォルスターが自己の新聞の表題の一部に、あえてマラーの新聞名を示唆する“Volksfreund”(=“Ami du peuple”)を採ったのも、理由のないわけではなかった。しかし同時に、R. ライヒャルトの指摘するごとく、『人民の友』が“Pamphlet-Zeitung”¹³⁾(「政治的な攻撃新聞」の意)のたぐいであるならば、このサブタイトルはマインツ・ジャコバンクラブ「自由と平等の友の会」の進むべき道、すなわち革命の事業の遂行の道を指示する符号でもあった。クラブ内部にすでに「解体傾向」を認めたフォルスターは「革命論争における主導的役割を演じる」¹⁴⁾ことの必要性を痛感していた。そのことをはっきり伝えるのが

「1793年元旦の自由と平等の友の会への呼びかけ」であろう。新しく「友の会」の会長に選出されたフォルスターの新年のクラブ演説である。その一部を引用しておく。「兄弟としての協調がわれわれの唯一の強みである、とわれわれは無意識に感じていた。にもかかわらず、すでにわれわれは別離の時点をいく度か (Augenblicke der Trennung) 体験した。弱い兄弟たち、あるいは誤った兄弟たちはわれわれの会議から身を引いた。われわれの名簿から自分の名前を抹殺した。かれらの誘惑的な実例によって友の会に解体という、とどめの一突きを見舞おうとした。」¹⁵⁾ マインツ・ジャコバンクラブの「解体」を誘発しかねない危険な因子を、ここでフォルスターは穏やかに「別離」と表現している。かれはフランスにおいてそれを「プリソーとロベスピエール」¹⁶⁾のあいだに見た。

このジロンド派とジャコバン派の対立の構図は明らかにマインツの政治状況を代弁している。それは直接『新マインツ新聞』刊行にかかわる事情を暗示する。『新マインツ新聞』の編集人フォルスターは自己に対立する者として『マインツ国民新聞』の編集人ペーマーを視野に入れる。そのあたりの状況をフォルスターは妻テレゼにあてて (1792.12.22.) つぎのように書いている。「フランス憲法の受諾に賛成する意思表示を集めるこの仕事にあたって、卑劣なペーマーは公然とぼくたちに対して反対行動をとりはじめています。せいぜいそんなことしかできないのでしょうか。かれの新聞でペーマーはぼくたちの措置を徹底的に批判しているのです。そんなわけでぼくたちは今日、かれを将軍に訴えざるをえませんでした。」¹⁷⁾ フォルスターたちの「仕事」の背景には、フランス共和国に協調する国民を軍事的にも援助するという、1792年11月19日のフランス国民公会の布告があった。マインツのクラブは、ライン地方のフランス占領地域においてこの援助を受け入れる意思を、21歳以上の男子で投票権を有する市民による署名を通じて、確認することを決定した。12月17日-19日に行われたこの調査は、マインツ革命の賛否を問ういわゆる「赤と黒の名簿」につぐ2度目の公式尋問ともいべき試みであった。¹⁸⁾ この種の活動は、きたる1793年春のマインツ国民公会議員選挙に連なっていく。それはマインツ共和国成立の基礎固めというべき重要な政治活動、大衆啓蒙活動であった。前述のテレゼあての書簡からうかがい知れる、フォルスターとペーマーの確執について、K.-G. ポップはつぎのようにコメントしている。「マインツ・ジャコバン主義者たちのあいだの対抗関係を反映するこの対決は、意思表示の集計にさいし、結果を不確実なものとした。」¹⁹⁾ それではこの二人の確執の背景に何があり、二人は何を問題としたのであろうか。

3

先のテレゼあての手紙において触れられた、フォルスターの将軍への「訴え」をまずみておく。1792年12月22日付のキュスティーン将軍にあてた書状のなかでのべられた、フォルスターのペーマー弾劾の内容をかいつまんで言えば、つぎようになる。²⁰⁾ すなわち、マインツ臨時行政府は、マインツをフランス共和国に併合したい、という請願をフランス国民公会に提出するための代表団を派遣するつもりでいた。しかるに『マインツ国民新聞』の編集者ペーマーはキュスティーン将軍の発言を歪曲し、あたかもキュスティーンが代表団派遣は「むだだ」(inutile)、と言ったかのような印象を読者にあたえている。いったいペーマーにはアナーキズムをひき起こす傾向、「臨時政権」の信用を失墜させようとする傾向、その他の悪しき傾向があるのではないか、というのである。以上のように、フォルスタ

一の「訴え」は意地悪く言えばキュスティーンヌの御伽衆ともいうべきペーマーを告発するものであるから、主君たるキュスティーンヌにとっては快い内容ではなかったはずである。ペーマーその人に対しては、フォルスターは週刊誌『愛国者』（1793.1.2.~4.と推定される）に「マインツ国民新聞（第193, 194号=1792年12月20, 21日）の編集者の疑問について」²¹⁾と題して、ペーマーの記事に対する反論を試みている。フォルスターの反論によれば、ペーマーはつぎの2点に関して『マインツ国民新聞』に書きため、新設されたばかりのマインツ臨時行政府の活動を妨害した。すなわち、一人のマインツ市民がある家に宿営する予定の数人の人物を告発したところ、その家の下男に殴りつけられたが、「市役所」(die Municipality)は被害者に対し何の保護措置もとらなかった。もう一つは、マインツのフランス併合の請願をフランス国民公会に提出するための代表団を選出に関するものである。それについてペーマーは、マインツ臨時行政府は他のフランス占領地域を無視し、マインツ地域だけでこっそり代表を選ぼうとしている、と誹謗した。以上の2点に関して、フォルスターはマインツの政治状況とのかかわりで、要領を得た反論を試みたわけである。それは読者を引き寄せる文章でつづられ、まさしく19, 20世紀の革命家にみられる政治的論破を想起させるものだ。一種独特の説得力に富む鮮明な反駁といってよい。

フランス国民公会へのマインツ代表団派遣はもはや不要となった。その事情をフォルスターはつぎのように説明している。つまり、市民キュスティーンヌがその派遣を「無意味だ」(zwecklos ~ ペーマーが「マインツ国民新聞」で報道したキュスティーンヌの言葉である!)と考えているからではなく、12月15日の国民公会の布告によってマインツに「代表委員」(Kommissarien)が到着することになったからである。「かれらの助言がわれわれを指導し、フランスとの併合を加速させるであろう」²²⁾とフォルスターは書いている。こうしてマインツ共和国設立のプログラムは12月15(17,22)日の布告²³⁾によって大きく進展することになるのだが、マインツ「臨時行政府」(11月19日に発足)にとって、1792年12月は大きな試練の時期であった。12月2日、フランクフルトはプロイセン・ヘッセン軍によって奪還された。「ぼくたちがフランクフルトを取りもどしていたら、自由の受諾に賛成する全国土の意思をも獲得しているのに」とフォルスターはテレゼにマインツの苦境をもらしている。(1792.12.22.)マインツをめぐるこのようなきびしい政治状況のなかで、フォルスターはマインツ占領軍の司令官キュスティーンヌ将軍に「訴え」したのである。

ここで1792年末のマインツの状況をながめてみよう。フランス国民公会の12月15日の布告は12月24日にマインツに知らされ、ドイツ語の翻訳がペーマーによって27日の『マインツ国民新聞』に載った。先の11月19日と12月15日の布告に関連して、フォルスターは『新マインツ新聞』創刊号でつぎのようにのべている。「フランス憲法の自発的受諾とフランス共和国との合併の希望は、聞くところによれば、わずかの例外を除けば、シュパイアーからピンゲンに至る地方で住民の圧倒的多数の署名によって確認された。[...] 12月16, 17, 22日の国民公会の布告は、われわれに同国人をすべて暫定的に単位市会議(Urversammlungen)と選挙会議に集合させるよう指示しているが、いまやその政策は上述の署名によって、いっそう障害を減少させることになるだろう。ほぼ全員一致の、あの意思表示はすでに真実の自由の宣言とみなすことができるからだ。」[Nr.1;1.1.] 11月19日の布告は「自分たちの根源的自由(ursprüngliche Freiheit)を奪還しようと欲するすべての諸国民に兄弟としての愛と支援」²⁴⁾を、フランス共和国の「軍隊」を持ってして、約束するものであった。その方針を継承する12月15日の布

告はつぎのように明言する。フランス占領地域に「臨時行政府」(eine provisorische Regierung)を設置する(第2条)。そして住民が「国民主権と独立、自由と平等に賛成の態度を表明した」時点で「自由な国民政府(eine freie Volksregierung)が導入される」²⁵⁾(第9条)。それまでは「共和国の軍隊」は「武器を収める」ことはしないという、フランスの強い意志がそこに表明されている。

革命家としてのフォルスターは「臨時行政府」から「自由な国民政府」の樹立をマインツ革命の目標にすえる。「自由な」(frei)という語句はフォルスターにあっては、11月19日の布告にいう「根源的自由」に通じると同時に、12月15日の布告で宣言されているように、封建的諸勢力、諸制度からの解放をも意味していよう。「新マインツ新聞」は革命の理念を読者に説きつつ、フランスの「支援」の進展状況の情報をヨーロッパ規模で(むろん新大陸も視野に入る)伝える。そのことは『新マインツ新聞』創刊号の冒頭で以下のように明記されている。「出版の自由はついに、印刷機が発明されたこの都市の内部を支配している。当地では毎日、善良な民衆の教化のために新しい寄稿が出版されている。しかし眼帯はやっと先ごろ目からはずされたばかりなので、民衆は真実の太陽をただまぶしように目を細くして見つめている。だから徐々にその恵みの光に慣れねばならない。やがてわれわれの都市は、明るいさわやかな光線を遠方に放射する数多くの光の保管庫の一つに変わるのだ。当地で一つの新しい新聞が発行されることに対して、地元の人たちも、外国の人たちも無関心ではおれまい。というのも、この新聞は政治的事件について、さらに現時点にあって特に注目すべき、重要な、ほとんどすでに決着のついた、専制的権力との戦いについて、関連のある、うまく選択された、できるかぎり完全なニュースを提供するはずになっているからである。」[Nr.1;1.1.] 冒頭に置かれた1つの複合文(「出版の自由はついに、印刷機が発明されたこの都市の内部を支配している。」)“Die Preßfreiheit herrscht endlich innerhalb diesen Mauern, wo die Buchdruckerpreße erfunden ward.”)は『新マインツ新聞』のはたすべき役割を高らかに歌い上げる。と同時にそれは、「新しい新聞の執筆者たち」の歓喜、あるいは「かれらの同胞すべての幸福、自由、法における平等を促進することに対する熱狂」を伝える。その喜びはマインツ選帝侯エルタールの専制政治から解放された生なましい喜びでもあったろう。この格調高い書き出しは解放の記念碑として立つと同時に、出版物に寄せる啓蒙主義的革命家の期待をも如実に語っている。ナチュラリストであり、その分野での傑出した翻訳者、書評家でもあったフォルスターは印刷物の影響力については、身にしみて熟知していたにちがいない。

フランス占領地域マインツに対するドイツ国内の軍事的動きは急を告げていた。友人フォスあてのフォルスターの書簡(1792.12.21.)から、いわゆるマインツ革命に対するフォルスターの考えが読み取れる。フォルスターはマインツを舞台とするドイツとフランスの戦争を極力回避しなくてはならない、と考えていた。マインツの地に新しい革命権力を樹立するために、ドイツ(プロイセン)との不幸な戦争を遂行するのはいたたまれない気がする。「ドイツではまだ革命の機が熟していない」からだ。これはできればフランスに向けたメッセージでもあろう。他方、ドイツの王侯に対しては「見境ない殺戮」、「あらゆる領地の破壊」につながる戦いはやめて欲しい、と懇願する。マインツがフランスに占領されているという現状を承認するよう求める。ドイツ(マインツ)において「改革が平和的に、穏やかに準備され、遂行される」ことが理想である、とフォルスターはフォスに説く。そして最後に、自分は「恐ろしいほどはっきりと雷雲(Gewitterwolke)の全体の力——これはフランスの革命軍の力を意味していると思われる——を認識しており、それを何とか他の方向に導き、分散させたいと語る。

この書簡でフォルスターがフォスに告げているのは、マインツの政治状況の苦悩でしかない。ドイツとフランスという強国にはさまれた弱小国マインツの選択の苦悩である。書簡に表れたこのような現状認識にもめげず、フォルスターはフランス革命の協力者、実践者として新しい年を迎えるべく、マインツでの活動を継続、推進する。そのさまをテレゼにつぎのように綴っている。(1792.12.31.) 「ぼくの仕事は以前にも増してひどいのです。ぼくの仕事にもはや終りはありません。やる気のあるロパの背にすべてが積まれます。ぼくは2つの委員会ですでに委員長をやりました。こんどは会全体の長に選出されましたので、明日からぼくの仕事を開始します。それに加えて、ぼくたちは3日まえに決議して、新しい新聞を執筆することにしたのです。明日ぼくたちの作品第1号が発行されます。ぼくはある晩、編集、資金手配、関与者の関係、さまざまの官吏の該当業務にかかわる全体計画を立案しました。要するに、必要なことはすべて立案したのです。そうでもしないと、第1号はおそらく1794年にやっとでき上がるのではないのでしょうか。だが、ぼくが絶えず新聞を書くことになろう、とは考えなくて済ませ。12人の編集者がいて、交代するのです。」マインツ革命のクライマックスを迎える時期ともいうべき、1793年の元日から3月末にかけて刊行された『新マインツ新聞』は、編集者たちが密接に協力して革命の状況と意味を、文字通り心血を注いで書き綴ったジャーナリズムの傑作と呼んでよいだろう。他方、「その多数の、戦闘的に革命の大儀を宣伝し、焦眉のマインツ問題を啓蒙的に取り上げる記事をフォルスターはほとんどすべて自力で執筆した」²⁶⁾ というシュタイナーによる評は、新聞刊行におけるフォルスターの独自性を明言している。

フォルスターがじっさい、『新マインツ新聞』のどの部分の記事を書いたか、あるいはかれの書いた記事が全体のどれほどの分量を占めるかは、はっきりしていないようだ。²⁷⁾ H.フィードラーも『ゲオルク・フォルスター文献目録1767-1970』の中で、この新聞について、つぎのように注釈するにとどめている。「匿名で編集されているが、大部分はフォルスターによって執筆されている。フォルスターは2箇所で自分の名前を挙げているだけである」。²⁸⁾ フォルスター自身、テレゼあての手紙(1793.1.8.)で、「一般行政府のメンバー」であり、「クラブの会長」であり、「新しい新聞を書いている」ため、多忙をきわめている、と報告している。また「協力者」といえる人びとやフォルスターの仕事を理解し、かれの熱意を分かちあえる友もないままに、自分の生きがいを追求している、とも。この言説から新聞の編集業務におけるフォルスターの役割の詳細は簡単には読み取れない。しかし、あれだけの多彩な情報と革命的イデオロギーを掲載した新聞を週3回発行できたことは、フォルスターの尽きることを知らぬジャーナリスティックなエネルギーを証明して余るものがある。

4

『新マインツ新聞』が提供する記事はすべて、マインツ革命につらなるドイツ(マインツ)とヨーロッパの政治情勢を扱う。『新マインツ新聞』は毎号の冒頭にマインツ共和国とパリの国民公会のニュースを掲載している。そのあとに執筆される記事を、ライヒャルトはつぎのように3つに分ける。²⁹⁾ 第1はフォルスターが自分でドイツ語に翻訳したフランス語テキストである。(キュスティーン将軍の政治的告示、フランス国民公会の委員による檄、フランス国民に対する国民公会のメッセージ) 第2は反王党派の立場から書かれた、ルイ16世の処刑をめぐる連載記事である。第3はヨーロッパ諸国に

おける愛国的活動と革命運動であり、その紹介によって、フォルスターは「一つの共和主義的『インターナショナル』の考えをも読者に仲介しようとした」ことは疑いえない。

『新マインツ新聞』全号にわたる特徴として、ライヒャルトが挙げた市民革命の「インターナショナル」ともいうべき、ヨーロッパにおける革命運動に関する観点から書かれた記事群をまず指摘しなければならない。マインツ共和国の誕生の過程は他のヨーロッパ諸都市の事件の大きな環の連鎖の一つのなかのできごとであることを、この新聞は意識的に読者に伝えようとしている。毎号、ヨーロッパ諸都市の革命にかかわる記事が掲載される。週3回、ヨーロッパ各地の政治記事がマインツの読者に伝えられる。このような国際主義（あるいはコスモポリタニズムと呼ぶこともできる）に基づき、ヨーロッパ市民革命の状況を同時的にマインツ革命の担い手に知らせるといふ、啓蒙主義的戦略は『新マインツ新聞』の最も重要な任務の一つであった。そこでは現実の政治情勢が、フランス革命の理念を語る、ヨーロッパ共通の語彙ともいふべき啓蒙の符号に変えられている、と見るべきかもしれない。それは社会進歩を信奉する者には容易に理解できた、まさしく世紀共通の符号であった。

『新マインツ新聞』のコスモポリタニズム的性格は創刊号のつぎの個所で、力強く語られている。少し長く引用しておく。「一致結束した国民の意志が8月10日以来、フランスでどのような行為をひき起こしたかを、ヨーロッパは驚きと感嘆の念をもってながめてきたし、後世はそれを読むことになろう。支配者の杖、すなわち大きな内部の敵の杖が折られた瞬間から、10万の傭兵の軍勢は、自由な、決然とした、確信をもって正義のために戦う男たちの小集団をまえに敗退せざるをえなかった。くだんの操り人形どもがこの自由の国を去ってしまったあと、まもなく勇敢な共和主義者たちが、自由の恵みをかれらの呻吟する隣人にもたらすために、四方に向かってかれらの国境を越えて、なだれ打って出て行った。シュパイアーからピンゲンに至る全ライン左岸、全フランドル、ブラバント、ヘネガウ、ナミュール、リンブルフとヘルデルン、アーヘン、ケルン、ボン、全リエージュ、スタプロとマルメディ、全サヴォアとニースは無敵のフランス軍の所有に帰している。それゆえ自由である。難攻不落と信じられていた要塞、もし自由な人びとの手中にあれば難攻不落となっていたであろう要塞、マインツ、アントワープ、ナミュール、リエージュは自由に熱狂するフランス軍の激しい攻撃に耐えられなかった。これがここ3か月以内に起こった行動である。」ここで指摘される1792年8月10日のできごととは、立法議会がルイ16世の権利を停止させ、臨時執行委員会によってその職務を代行させ、国王の最終的運命を普通選挙によって選出された国民公会にゆだねることを決定した事件を指す。³⁰⁾ それは国民公会の開催、王政廃止（1792.9.21.）、共和制宣言（9.22.）へと突き進む革命ドラマの序曲であった。ちなみにこの時期をゲーテとのかかわりにおいて記せば、つぎようになる—フランス戦役：従者ゴツツェを連れてカール・アウグストの陣営へ旅立つ（1792.8.8.）、マインツ滞在：フォルスター、ゼメリング、カロリーネ・ペーマー、L.F.フーバーと出会う（8.20./21.）、ヴァルミーの砲撃（9.20.）、ヴァイマル連隊の退却開始（9.30.）。年表はさらに、マインツの砲撃開始（1793.6.19.）、破壊されたマインツに滞在するゲーテ（7.26./27.）とつづく。そのころ（1791-93）ゲーテが書いた作品を挙げれば、いわゆる革命喜劇『大コフタ』と『市民将軍』、未完の戯曲『激昂した人びと』、それに風刺的叙事詩『狐ライネケ』（刊行は1794.6.）がある。ときにゲーテ42-44歳の作品である。³¹⁾ 同じ時代を生きるヴァイマルのゲーテとかれより5歳年下のマインツのフォルスターをとりまく政治情勢の温度差は、上記のゲーテの作品とフォルスターの『新マインツ新聞』の落差となって表れている。

若きころイギリスの探検家クックと3年におよぶ世界周航をはたしたフォルスターの活動の舞台はフランス軍の占領下のマインツであった。かつて南洋の自然と人と生活を観察した目はいまや、フランス革命と西ヨーロッパの革命運動の一点を凝視する。

風刺二行短詩『クセーニエン』(1796)の作家たち(ゲーテとシラー)は墓のなかに眠るフォルスターに激越な調子の嘲笑を差し向けた。フォルスターにとって自由の獲得は全人類的な課題であり、そのためにはマインツがフランス革命軍の支配圏に陥ることも、あえていとわなかった。ゲーテにとってマインツの革命家たちの自由のための戦いは、決して全人類的課題の範疇として認められるものではなかった。フォルスターに倍する歳月を生きたゲーテは、「詩と真実」の視点から人類史の課題を一つ一つ作品化していったのではないか。フォルスターはゲーテのように世界を表象する詩人の文体を所有していなかった。『クセーニエン』の作家たちにとって、「地獄のなかを怒鳴り散らす」³²⁾フォルスターはさながらホフマンスタールの悲劇『塔』の主人公、塔に幽閉されたジークスマント王子のように、意味の通じぬ言葉を発する奇人のように映った、といえないだろうか。あるいは『クセーニエン』の作家たちは、いわばかれらの言語の託宣によって、革命家フォルスターを抹殺しようとくわだてたのであろうか。いずれにせよ、ゲーテが革命家としてのフォルスターの活動をどこまで知っていたか、という実証的研究はない。かのリヒテンベルクが革命家フォルスターをいかに注目しながら追跡していたかを論じ、パリに消えたフォルスターを「まったく見失った」のではなかった、³³⁾と結論づけるW.レーデルの労作に匹敵する、フォルスターとゲーテの関係を論じる本格的な研究は存在しない。³⁴⁾

『新マインツ新聞』創刊号のフォルスターの論説(「マインツ、1月1日」)にみられる文体は、ある種の人びとがフォルスターについて負のイメージを作り上げるのに寄与した。すでにK.クラインは『マインツのフォルスター 1788-1793年』(1863)において、創刊号の論説を引き合いに出して、つぎのように書いている。「フォルスターはつねに美辞を弄するすべを心得ており、善いものと有益なものを約束する。しかしわれわれが知っているように、妻がかれに対してとがめている自己欺まんと弱さはかれをつねに善意の意図からそらせる。」³⁵⁾クラインが曲解している個所を本稿で引用するのは控えるが、『新マインツ新聞』の編集方針ないし理念をのべた数行である。それに対して、「美辞を弄する」という陳腐な雑言を放つのは、適切を欠くというべきである。「ドイツ国家的保守主義」の典型とも言える、マインツの郷土史家クラインのこの著書は、G.シュタイナーによれば、「フォルスターに卑劣な非国民かつ売国奴の目印をつける」³⁶⁾ために書かれた。また「大多数の同時代人はフォルスターに対し非常に厳しい判決を下した」³⁷⁾が、現今の判定はそうした「不正」の償いをすませている、と文学史家H.ヘットナーは『18世紀のドイツ文学史』(第3版、1879)に書いた。そして「ゲオルク・フォルスターの名前はいつまでもドイツ人の『快い追想のうちに』生きつづけるであろう」とも。

ヘットナーの記述から約1世紀のち、ふたたび『新マインツ新聞』の編者フォルスターの文体は組上に載せられる。S.パートベルクは本稿前ページに引用した『新マインツ新聞』創刊号の論説部分(「支配者の杖、すなわち大きな内部の敵の杖が折られた瞬間から [...] 国境を越えて、なだれ打って出て行った。」)に関して、つぎのように批評する。「この個所にみられる、フォルスターの称賛演説 = 誇張法ふうの文体はマインツにおけるジャコバン主義のアジテーションのますます激しくなる言語変化に対応している。この言語変化は通俗化した、かつ政治問題化した啓蒙的教授法から、感情的な作用戦術(emotionale Wirkungsstrategien)をいっそう強く志向するレトリックへと重点を移動させた。

この変更は啓蒙的効果の減少の経験の結果として起こった。」³⁸⁾『新マインツ新聞』のようなマインツ革命と直接かかわる新聞であれば、その文体が読者の共感を期待するアジテーション的色彩をおびるのは当然かもしれない。しかしフォルスターの文体に「感情的な作用戦略」が投影されているとするのは、*「木を見て森を見ず」*の類の短絡以外の何ものでもない。『新マインツ新聞』の記事が啓蒙主義的思索の書ともいえる『ニーダーラインの観察考』(1791, 92)と『マインツ革命叙説』(1793年執筆)の著者によって書かれていることを想起すれば、つねにヨーロッパの革命状況を読者のために啓蒙の精神に沿って記述するフォルスターの文体を、パートベルクのように「感情」を重視する「レトリック」への戦略的「変化」と結びつけるのは、いささか安易に過ぎるであろう。

『新マインツ新聞』がニュース提供という新聞の使命から、きわめて平易な文章で綴られていることは、まぎれもない事実である。しかし『新マインツ新聞』をすぐれた時代の革命的ドキュメントとしているゆえんは、まさしく姑息な戦術としての「感情」を排除した、全ヨーロッパの記事のもつある種の客観性によるのである。諸事実を関連づけ、一つの包括的テーマに集約するフォルスターの文才は、たとえば『オーストラリアとボタニ湾のイギリスの植民地』(1786)や『アメリカ北西海岸とその地の毛皮取引』(1791)に見られるところである。『新マインツ新聞』の執筆者フォルスターはその全紙面に、封建制を拒絶し、自由を希求する革命精神の息吹を吹きこもうとした。そのために、いわば自由の賛歌のリフレインが折りに挿入される。それは編者の立場をより鮮明にさせ、読者をヨーロッパ市民革命の広大な舞台に誘い出す文体といつてよいだろう。かつて R.-R. ヴーテノーは「この『ジャコバン主義者』として悪評高い文筆家」³⁹⁾の救済者として、フリードリヒ・シュレーゲル、ゲルヴィーヌス、モーレショット、そしてホフマンスタールとベンヤミンの名を挙げ、「世界市民」であり、「共和主義者」であるフォルスターの評価のパラダイムを提起したが、この提起はいまなお効力を失っていない。『新マインツ新聞』の文体も、この枠組みのなかで評価されるべきであろう。「新マインツ新聞」の叙述もまた、S. ゴルトマンの言葉を転用すれば、「教え、説得し、そして感動させる」⁴⁰⁾ (*es belehrt, überzeugt und bewegt.*)。

5

マインツ国民公会は「独立の共和国をつくり、フランスとの同盟によって保護を求める」かそれともフランスが「われわれの新しい共和国を統合する」よう要請するか、二者択一を迫られていた。ドイツの君主たちが「国民主権、自由と平等の原則を主張する小国」を容認する見こみはないからだ。フランスと同盟を結び、その保護を求めるにしても、その物質的代価はあまりにも大きすぎる。ならば「偉大なフランス共和国の一部」となり、「フランス市民の権利と義務」を分かち合うしか道はない。[Nr.35;3.22.]『新マインツ新聞』第36号(3.24.)は3月23日のマインツ国民公会の議決をつぎのように報告している。「ライン・ドイツの自由な国民はフランス共和国への併合を望む」と。

「マインツ革命には、革命的転換期におけるドイツの社会的進歩にとって範例的要素が内在する」⁴¹⁾とシェールはマインツ革命の意義を指摘する。とはいえ、マインツ革命ならびにその指導者フォルスターに対する評価は、シェールものべるように、この2世紀にかけて賛否両論があり、決して一様ではない。本稿の結びとして、『新マインツ新聞』第33号(3.17.)から読み取れるマインツ革命の意味を

考察したい。ついでにいえば、それにつづく第34、35号(3.19, 3.22.)はライン・ドイツ国民公会開催に備えてのマインツ・ジャコバンクラブの「浄化」[Nr.34]、マインツ共和国設立の理念(「自由な、独立したunabhängigen、分離すべからざる国家」[Nr.34])と現実(マインツ共和国の「フランスとの統合Vereinigung」[Nr.35])など、マインツをめぐるあわただしい動きを報告する。それと並行して、フランスが西ヨーロッパ各地につくろうとする革命衛星国とそれを許すまいと攻撃を仕掛けるプロイセン、オーストリア軍との攻防をも生き生きと伝える—「リエージュとアーヘンを征服した敵軍に対する、フランス市民軍の押し寄せる進軍は徹頭徹尾、共和主義者の性格にふさわしい。パリだけで3万の兵士を提供した。リエージュは共和国に併合されたので、フランスは敵をその国から追い出そうとしている。その熱意は、プロイセンとオーストリア軍をシャンパーニュとロートリンゲン地方から駆逐したときの熱意に勝るとも劣らない。」[Nr.35]とところで第33号の内容はいわゆるニュースパリュエの観点からすれば、何も特別な号ではない。しかしそれはドイツ最初の共和国の議会、「ライン・ドイツ国民公会」開会の日付(共和暦第2年、1793年3月17日、日曜日)を冠する、やはり特別な号といえよう。

【新マインツ新聞】第33号は他の号と同じく、記事の舞台となる地名をそれぞれの表題に掲げている。それを列挙すれば、「マインツ、3月16日」、「パリ、3月10日」、「ブリュッセル、1793年3月7日」、「ウィーン、2月23日」、「ペテルスブルク、2月15日」、「ストックホルム、2月22日」、「雑報欄」、それに「通知」と「掲示」が加わる。第33号の柱は「マインツ」と「ブリュッセル」の記事である。「パリ」に関する記事は、ルイ16世の処刑(1793.1.21.)にかかわる裁判の経過とヨーロッパ革命運動の司令塔としての役割のために、おしなべて『新マインツ新聞』の前半の各号における中心的話題の1つとなっていた。第33号の「パリ、3月10日」は「ブリュッセル、1793年3月7日」への橋渡し役として、つぎの言葉をもってその短いスペースを締めくくる。「ネーデルランドに滞在中の国民公会の委員諸氏の以下の書簡は、敵の見せかけの前進についてわれわれはいささかも恐れることはない、と十分に知らせている」。これは「ブリュッセル」の記事の重要性の予告となっている。

「マインツ、3月16日」はランダウからモーゼルに至るライン左岸の国土のあらゆる地域から、「自由なドイツの自治体(Gemeinen)の代議員」が「ドイツ国民公会」に結集する前日である。国民公会は「国民の主権」を管理する。公会は全国土に対する「上級一般行政府」を「暫定的に(provisorisch)設立する」。「暫定的に」という意味は、フランス国民公会によるマインツ共和国の併合の承認を待つ、ということであろう。それまでは臨時の立法・司法・行政の府であるといった、手続き上のプログラムを記したものであろう。それにつづいて3月17日の意義が以下のようにのべられる。「1千年以来、いまはじめて太陽が自由なドイツの国民会議の上に昇る。専制君主のくびきから解放された何千という人間の運命がこの会議に委託されている。市民諸君、この日はわれわれが体験した最も神聖な日なのです。というのも、国民という国民はすべてこの日を待ち望んでいたが、それを見ることができなかったからです。40世代もの人たちが、抑圧と人類にふさわしくない苦しみのなかで衰弱させられた生を終えて、死んでいきました。解放の偉大な日が姿をあらわす、それ以前に。」マインツ革命は、クラウス・トレーガーもいうように、「市民的革命家」対「特権的都市市民階級、聖職者、そして地方貴族によって扇動されたツンフト市民、農民」⁴²⁾のあいだで戦われた戦闘であった。革命を遂行する知識層が掲げる「国民の主権」や啓蒙運動の象徴というべき「太陽」のイメージが、「ツンフト市

民、農民」にとってどれだけ疎遠な概念であったかは、想像にかたくない。

A.P.ダントレーヴは聖トーマスの自然法理論のうち、「自然の理性の光」はわれわれに「善と悪とを識別」（『神学大全』）させるという指摘を重視して、つぎのようにいう。「それはおそらくプラトンやアウグスティヌスなどの淵源に遡るものであり、そしてまた後代にも自然法概念と密接に結合して存続しているものである。」⁴³『新マインツ新聞』が掲げる「太陽」は聖トーマスのいう「善と悪とを識別」させる「自然の理性の光」と同義語と解釈できる。自然法の知識がマインツの革命家のうちでどのように集積され、発酵させられたかは、筆者には未見の領域である。しかし先に引用した部分（「1千年以来、いまはじめて [...] 解放の偉大な日が姿をあらわす、それ以前に。」）が「理性は人間の本質であり、人間の偉大さを成すにあずかって力ある神の閃光である」というダントレーヴの注釈と同一の文脈の理解を許していることは、明白であるように思える。国民の「諸権利を奪った極悪非道な輩」と対峙してきたのは「ドイツの自由の守護神（Genius）」なのだとして『新マインツ新聞』は説く。ただしこのような論調は、ラテン語に由来する「公会」（Konvent）や「主権」（Souverainität）同様に、一般市民と農民には縁遠い語彙であったろう。まさにマインツ革命は「フランス軍の火の杖」（der Feuerstab des Franken）なくしては不可能な事件であった。

「ブリュッセル、1793年3月7日」は第33号のほぼ半分に達するスペースを占める。このフランス国民公会の委員たちの書簡という形でまとめられた記事は、ブリュッセル、ブラバント地方、さらに東部のリエージュ、アーヘンにおけるフランス軍各部隊の苦戦の状況を暗示している。それは「フランス軍は敵をいたる所で駆逐し、勇敢さの奇跡を成しとげた」とか「イレール將軍はわれわれの所へ輝かしい退却をしてきた」とか、含みある表現からも読み取れよう。マチエはその著『フランス大革命』のなかで、つぎのように書いている。「1792年秋に征服された天然の国境は、1793年の春に数週間であしなわれた。ネールウィンデンの敗北後、三月末にフランスはベルギー全土から撤退した、またライン川の左岸はそれから数日後におなじ運命におちいった。四月始めにフランス軍は、北東の国境の外では、もはや包囲されたマインツ要塞だけをもつにすぎなかった。」⁴⁴ライン左岸の喪失はベルギー喪失の結果であったともいわれる。⁴⁵後世の歴史家から見れば、マインツ共和国の運命はその成立の日（3月17日）にはほぼ決まっていたというべきであろうか。なぜなら、マインツ共和国の構想はフランス側の手中にあったからだ。それは「徹頭徹尾ジロンド党の思想であった（durchaus girondistisch）」⁴⁶からだ。

マインツ・ジャコバン主義者の「目的」は、とJ.ヘルゲンはいう、「フランス人による軍事的方法ですでに達成された成果の能動的な追体験（der aktive Nachvollzug）」⁴⁷であった。ゆえに、ジャコバン主義者は国民大衆の「革命的な意識の創造」を焦眉の課題とみなした。「報道を旨とする報告提供から意見をのべるジャーナリズムへの過渡期」⁴⁸（im Übergang von einer referierenden Berichterstattung zum Meinungsjournalismus）の要にあったのが、『新マインツ新聞』であった、といえるだろう。フォルスターをはじめとする多くのマインツ・ジャコバン主義者は、フランス革命の提起する近代市民社会の政治的概念とその実践形態をマインツ国民に啓蒙しようと努めた。『新マインツ新聞』第33号が伝えるマインツ革命をめぐる諸状況は、ドイツ最初の共和国の運命がヨーロッパ規模の事件と連動している事実を認識させた。と同時に、マインツ・ジャコバン主義者によって、専制にまっこうから逆らうまったく新しい政治原則が語られたのである。マインツ革命の意義はこのような啓蒙と実践のうち

に存在するように思われる。

注

ゲオルク・フォルスターのテキストは『新マインツ新聞』を除き、下記の版を用いた。

Georg Forsters Werke. Sämtliche Schriften, Tagebücher, Briefe. Hg. von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Berlin (Akademie Verlag) 1958 ff. = AA と略記。

『新マインツ新聞』はつぎのテキストを用いた。

Die neue Mainzer Zeitung oder der Volksfreund. Nendeln/Liechtenstein (Kraus Reprint) 1976.

- 1) Die erste Adresse des Landes Rheinland-Pfalz. Geschichte des Deutschhauses in Mainz. Hg. vom Landtag Rheinland-Pfalz. Mainz (Verlag Phillip von Zabern) 1990のなかに以下の諸論文が所収されている — Dumont, Franz: Das erste Parlament in Deutschland / Mathy, Helmut: Andreas Joseph Hoffmann, der Präsident des Rheinisch-Deutschen Nationalkonvents / Dumont, Franz: »Stellvertreter des freien Volkes«. Die Mitglieder des Rheinisch- Deutschen Nationalkonvents.
- 2) Bundesarchiv und Stadt Mainz: Deutsche Jakobiner — Mainzer Republik und Cisrhenanen 1792-1798. Band 3: Katalog (2. Auflage 1982) に年表と簡潔な説明 (Daten zur Geschichte der Mainzer Republik, S.59; Belagerung von Mainz 1793, S.99) が掲載されているので参照した。
- 3) AA Bd. 17, S.685.
- 4) W.グループによると、『市民の友』は「共和主義的原則を農村の住民に宣伝すること」を使命としていた。「自身が農民階級の出身であったメッテルニヒは、高等な国政上の前提を素朴な人びとに理解させようと、心を砕いていた。そのためにかは文体と用語において民衆の想像世界に順応し、説明のための実例を農民の日常生活から選び取った。」(Grab, Walter: Ein Volk muß seine Freiheit selbst erobern. Zur Geschichte der deutschen Jakobiner. Frankfurt am Main, Olten, Wien, Büchergilde Gutenberg, 1984, S.186.) 『市民の友』を読むと、まことにそのような特徴を強く印象づけられる。
- 5) Grab, Walter: Ein Volk muß seine Freiheit selbst erobern. S.184.
- 6) Die Publizistik der Mainzer Jakobiner und ihrer Gegner. Zum 200. Jahrestag des Rheinisch-Deutschen Nationalkonvents und der Mainzer Republik. Stadt Mainz, 1993, S.198 f.
- 7) Georg Wilhelm Bohmer (1761-1839)。キュスティーンヌ将軍の秘書として、マインツの『自由と平等の友の会』設立に寄与した。なお、弟ヨハン・フランツ・ヴィルヘルムはドイツ・ロマン主義時代の才媛カロリーネ(1763-1809、ゲッティンゲン大学教授ミヒャエーリスの娘)の最初の夫。カロリーネは夫と死別したのち、A.W.シュレーゲル(1796)、哲学者シェリング(1803)と結婚する。
- 8) Die Publizistik der Mainzer Jakobiner und ihrer Gegner. S.198 を参照のこと。
- 9) Scheel, Heinrich: Die Mainzer Republik III. Berlin (Akademie-Verlag) 1989, S.76 f. を参照のこと。
- 10) 以下の個所を参照のこと。
 1. Weltbürger-Europäer-Deutscher-Franke. Georg Forster zum 200. Todestag. Ausstellungskatalog, hg. von Rolf Reichardt und Geneviève Roche. Universitätsbibliothek Mainz, 1994, S.254.

2. Grab, Walter: Ein Volk muß seine Freiheit selbst erobern. S.186.
3. AA Bd.17, S.685.
- 11) マラーを刺殺したコルデ・ダルモン (1758-93) については、フランス亡命中のフォルスターは妻テレーゼあての書簡のなかで、何度か言及している。
- 12) 桑原武夫編：『フランス革命の指導者』（朝日選書）1978、219ページ。
- 13) Weltbürger-Europäer-Deutscher-Franke. S.236.
- 14) Georg Forster. Werke in vier Bänden. Hg. von Gerhard Steiner. Bd.3, Frankfurt am Main (Insel Verlag) 1970, S.897.
- 15) AA Bd.10,1. S.58.
- 16) Ebd., S.59.
- 17) AA Bd.17, S.281.
- 18) Tervooren, Klaus: Die Mainzer Republik 1792/93. Frankfurt am Main (Verlag Peter Lang) 1982, S.168 を参照のこと。
- 19) AA Bd.17, S.675.
- 20) AA Bd.10,1. 100 f. を参照のこと。
- 21) Ebd., S.102-117 を参照のこと。
- 22) Ebd., S.117.
- 23) Scheel, Heinrich; Die Mainzer Republik I. Berlin (Akademie-Verlag) 1983, S.427-431 を参照のこと。
- 12月17日の布告の最終稿は22日に一部修正され、12月15日の原案にもどされた。最終稿のドイツ語訳は27日の『マインツ国民新聞』に、修正等については29日の『マインツ国民新聞』に掲載された。(Scheel, Heinrich: Die Mainzer Republik III, S.147 を参照のこと。)
- 24) Tervooren, Klaus: Die Mainzer Republik 1792/93. S.167.
- 25) Scheel, Heinrich: Die Mainzer Republik I. S.428 f.
- 26) Steiner, Gerhard: Georg Forster. Stuttgart (Sammlung Metzler) 1977, S.80.
- 27) この点について、カール・クラインはつぎのように注記している。「当時の習慣では編集者の名前は挙げられない。公的記載と口伝えによれば、新聞はフォルスターだけによって作られた。」(Klein, Karl: Georg Forster in Mainz 1788 bis 1793. Gotha, Verlag von Friedrich Andreas Perthes, 1863, S.28)
- 28) Fiedler, Horst: Georg-Forster-Bibliographie 1767 bis 1970. Berlin (Akademie-Verlag) 1971, S.69
- 29) Weltbürger-Europäer-Deutscher-Franke. S.235 f. を参照のこと。
- 30) フランソワ・フェレ/モナ・オズーフ編：『フランス革命事典1』みすず書房、1998、75—76ページを参照のこと。
- 31) Goethe Handbuch in vier Bänden. Chronologie, Bibliographie, Karten, Register (Hg. von Bernd Witte) Stuttgart・Weimar (Verlag Metzler) 1999, S.68-74 を参照のこと。
- 32) Xenien: Die dreifarbige Kokarde. In: Johann Wolfgang Goethe. Münchner Ausgabe. Bd.4.1, München (Carl Hanser Verlag) 1988, S.817.

- 33) Rödel, Wolfgang: Forster und Lichtenberg. Berlin (Rütten & Loening) 1960, S.118 を参照のこと。
- 34) つぎのライツマンの論文はフランス革命期のフォルスターを扱っている。
Leitzmann, Albert: Georg Forsters Beziehungen zu Goethe und Schiller und seine Verteidigung Schillers. In: Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen. Bd.88, 1892, S.129-156.
- 35) Klein, Karl: Georg Forster in Mainz. S.282.
- 36) Steiner, Gerhard: Georg Forster. S.118.
- 37) Hettner, Hermann: Geschichte der deutschen Literatur im achtzehnten Jahrhundert. Band I, Berlin und Weimar (Aufbau-Verlag) 1979, S.594.
- 38) Padberg, Stephan: Georg Forsters Position im Mainzer Jakobinismus. In: Georg Forster in seiner Epoche. Hg. von Gerhart Pickerodt. Berlin (Argument-Verlag) 1982, S.72 f.
- 39) Wuthenow, Ralph-Rainer: Vernunft und Republik. Studien zu Georg Forsters Schriften. Bad Homburg · Berlin · Zürich (Verlag Gehlen) 1970, S.111.
ここに挙げられたフォルスター救済の著作をつぎに掲げておく。
Friedrich Schlegel: Georg Forster. Fragment einer Charakteristik der deutschen Klassiker. (1797)
Georg Gottfried Gervinus: Johann Georg Forster. (1843)
Jacob Moleschott: Georg Forster, der Naturforscher des Volks. (1854)
Hugo von Hofmannsthal: Deutsches Lesebuch. (1922)
Walter Benjamin: Deutsche Menschen. (1936)
- 40) Goldmann, Stefan: Georg Forsters Rezeption der Antike oder Anmerkungen zu Affektstruktur des Zitats. In: Georg Forster in interdisziplinärer Perspektive. Hg. von Claus-Volker Klenke. Berlin (Akademie Verlag) 1994, S.329.
- 41) Scheel, Heinrich: Die Mainzer Republik III. S.295.
- 42) Mainz zwischen Rot und Schwarz. Die Mainzer Revolution 1792-1793 in Schriften, Reden und Briefen. Hg. von Claus Träger. Berlin (Rütten & Loening) 1963, S.32 f.
- 43) A.P.ダントレーヴ (久保正幡訳) : 『自然法』岩波書店、1960 (第8刷)、57ページ。
- 44) マチエ (ねずまさし・市原豊太訳) : 『フランス大革命』中 (岩波文庫) 1979 (第15刷)、243ページ。
- 45) アルベール・ソブール (小場瀬卓三・渡辺淳訳) : 『フランス革命』下 (岩波新書) 1975 (第24刷)、41ページ参照のこと。
- 46) Scheel, Heinrich: Die Mainzer Republik III. S.149.
- 47) Die Publizistik der Mainzer Jakobiner und ihrer Gegner. S.173 f.
- 48) Herrgen, Joachim: Die Sprache der Mainzer Republik (1792/93). Historisch-semantische Untersuchungen zur politischen Kommunikation. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 2000, S.113.